

6 各委員会活動報告

6-1 技術委員会活動報告

技術委員長 大西 淳一

1 はじめに

技術委員会は、日本学連の発足(1984年12月)の直後に誕生し、最も歴史の長い委員会である。また、規約によれば、現時点で唯一の常設委員会である。技術委員会の役割についての規程はとくにないが、学連にとって必要とされる活動を継続的に行っている。

近年の技術委員会の活動は、次のように大きく3つに分類される。

インカレに関わる活動

学生のレベルアップに関わる活動

ユニバーシアードに関わる活動

以下、それぞれについて概要を報告する。

2 インカレに関わる活動

インカレに関わる活動としてはまず、大会コントローラーの派遣がある。大会コントローラーは、インカレが実施規則を遵守して開催され、学生選手権にふさわしいものになっているかを確認する役割を担うものである。年2回のインカレについて、技術委員の中から大会コントローラーを選出し、実行委員会に対して派遣している。

大会コントローラーは、インカレ開催準備が進められるなかで、運営の方法や実施規則の解釈について実行委員会から相談を受けたり、疑問を感じたりする。その際には、大会コントローラーが技術委員会メーリングリストに投げかけ、そこで委員から出された意見を集約して結論を出すこ

ととしている。実施規則の一部条項を不適用とする場合には、それを理事会に報告し、承認を受けている。

さらに、インカレ後の委員会会合では「インカレレビュー」と題し、大会を振り返り、実行委員会や大会コントローラーからの報告、参加者や観戦者からの声を受けて、反省を次回に生かすための議論を行っている。必要であれば実施規則の改正も検討している。

ここ数年は、インカレの競技形式の変更についての議論を継続的に行っている。とくに01年度は、理事会からの依頼もあり、その議論を本格化させた。インカレ参加者の減少による参加費の減収に伴い運営を合理化すると同時に、競技性・ゲーム性を高めるという課題に対して、具体的な改革案を01年6月の学連総会において提示した。クラシックの競技者数(選手権の部の出場者数)を従来の3分の2(男子60名、女子40名)にする案と、男子リレーを4人制から3人制にする案である。その後、総会や幹事会などでも議論を進められているが、現時点で、02年度以降の方向性について最終的な結論はまだ出ていない。

このほか、インカレに関する技術委員会の活動としては、シード選手候補の選考(最終承認は理事会)や、選手権の部(クラシック、シヨート)競技者数の地区別配分の計算・発表がある。

[過去2年間の活動実績]

大会コントローラー派遣

ICS00(滋賀) 大井和之, 山岸甚太郎

IC00(愛知) 大西淳一, 落合公也,

- 吉村充功
 ICS01 (加賀) 吉村年史, 土屋周史
 IC01 (矢板) 柿並義宏, 竹澤聡
 2人目以降は大会コントローラー補佐を表
 示
 シード選手候補選考
 ICS00, IC00 (担当: 大西淳一)
 ICS01, IC01 (担当: 山口尚宏)
 競技者数(選手権の部)配分(担当: 吉村充功)
 IC00, ICS01, IC01, ICS02
 ICS00, ICS01では欠員発生による再配分
 も行った
 実施規則等の改正案作成(担当: 吉村充功)
 ・01年3月総会にて承認
 - 男子リレーの優勝設定時間(60分50
 分)
 - 地図の縮尺(リレーでの1万分の1採用
 を容認)
 - 電子パンチングシステムへの対応
 - 「パンチングシステムに関する細則」の
 制定
 - 配分規則の改正(発表方法の明示, 語句
 修正)
 ・01年11月総会にて承認
 - 計時方法の多様化(パンチングフィニッ
 シュを容認)
 - 裁定委員の交通費等の不支給
 - スタート方式の簡略化(プレスタートの
 省略を容認)

3 学生のレベルアップに関わる活動

まず, 競技技術のレベルアップを目的として開
 催している「学連合宿」であるが, すっかり定着
 した感がある。00年度は2回, 01年度は3回開
 催した。意識の高い学生, あるいは指導機会に恵
 まれない学生を対象として, レベルの高い練習の
 場を提供している。

また, 運営技術のレベルアップを目的として,
 技術委員会では過去にも各種の講習会を実施し

てきたが, 00, 01年度は3件実施した。

さらに, 日本学連が後援する大会のうち希望が
 あった大会に対して, 技術委員会からコントロー
 ラーを派遣(推薦)する事業を00年度から本格
 化させた。これも運営技術のレベルアップを目的
 としたものである。

[過去2年間の活動実績]

学連合宿

・00年度

第1回 愛知 2001.1.20~21 (担当: 奥
 村理也ほか)

第2回 栃木 2001.2.10~11 (担当: 石
 井泰朗ほか)

・01年度

第1回 静岡 2001.10.20~21 (担当: 石
 井泰朗)

第2回 岐阜 2002.1.12~13 (担当: 大
 北洋平, 西村宏久)

第3回 栃木 2002.2.9 (担当: 美濃部篤,
 堀出知里, 佐藤時則)

各種講習会

・emit講習会(講師: 羽鳥和重, 担当: 福井樹)
 2001.3.17 京都市中京青年の家

・競技規則勉強会(講師: 吉村充功, 担当: 福
 井樹)

2001.9.8 長野県伊那市立図書館
 参加35名(うち現役学生19名)

- 競技規則の体系

- IOF ルールの間違った使い方, 考慮され
 ていない点について

- 新JOA競技規則について

・地図調査講習会(講師: 羽鳥和重, 担当: 志
 村聡子)

机上講習 2002.1.12 東京・新宿スポー
 ツセンター

現地講習 2002.1.13 埼玉・美杉台公民
 館

コントローラー派遣・推薦

00.10 榛原大会 奥村理也

第 2 部 活動報告

00.11	筑波大大会	石澤俊崇
01.1	名古屋大大会	中村弘太郎, 羽鳥和重
01.2	早稲田大大会	柿並義宏
01.11	関西学連定例戦	奥村理也, 西村宏久
02.2	早大 OC 大会	羽鳥和重
02.6	東大 OLK 大会	西脇正展
02.10	筑波大大会	山口尚宏
02.10	京大大会	土屋周文

4 ユニバーシアードに関わる活動

ユニバーシアード(世界学生選手権)は2年に1度(偶数年に)開催される大会である。ユニバーシアードの代表派遣は日本学連の事業が行っており,このうち代表選手の選考会と強化合宿などを技術委員会が担当している。

[ユニバーシアード 2000 に関わる活動]

- ・選考会開催 2000.4 (担当:加賀屋博文ほか)
- ・合宿開催 2000.4~8
- ・申込事務手続き (担当:羽鳥和重)

5 さいごに

以上のように,技術委員会の活動は非常に多岐に渡っている。このため,それぞれの活動について担当者を決め,各委員が積極的に活動を行っているのが現状である。そして,疑問や問題が発生した際には,担当者は他の委員に意見を求め,委員会として合意の得られた結論を持ち帰るという形をとっている。委員会全体の議論は,おもにメーリングリストにおいてなされているが,都合がつけば一堂に会しての会合も行っている。

[技術委員会会合の記録]

- 2000.9.23 (東京・新宿コズミックスポーツセンター)
 - 日光インカレレビュー
 - インカレ実施規則改正案作成 ほか
- 2000.11.12 (滋賀・ガリバー旅行村) 出席委

- 員 9 名
 - 滋賀インカレショートレビュー
 - 派遣コントローラの人選,次年度委員会 人事 ほか
- 2001.3.11 (愛知・鬼久保ふれあい広場) 出席委員 9 名
 - 愛知インカレレビュー
 - 今後のインカレ競技について ほか
- 2001.4.21 (東京・日本学連事務局) 出席委員 5 名, 理事 2 名, 幹事 1 名
- 2001.4.22 (神奈川・かながわ県民センター) 出席委員 5 名, 理事 1 名
 - 委員会の人事, 会計, 今後の活動計画
 - インカレ改革案の検討(クラシック, リレー)
- 2001.6.3 (群馬・赤城自然園)
 - 今年度の活動計画, 役割分担
- 2001.9.8 (長野・伊那市立図書館) 出席委員 11 名
 - インカレ改革案についての再検討
 - 加賀インカレショートシード推薦選手の選考
- 2001.12.23 (兵庫・三木ホースランド) 出席委員 8 名
 - 矢板インカレシード推薦選手の選考

[技術委員の紹介]

【01年12月現在委員】大西淳一(委員長)/中村弘太郎/奥村理也/竹澤聡/志村聡子/吉村年史/柿並義宏/石澤俊崇/佐藤直季/佐藤時則/土屋周史/福井樹/堀出知里/美濃部篤/吉村充功/石井泰朗/山岸甚太郎/山口尚宏/西脇正展(名簿・ML 担当)/井上アヤ乃(会計担当)/大北洋平/西村宏久/許田重治/番場洋子

【01年3月退任】大井和之(委員長, 理事)/加賀屋博文(理事)/秋沢和宏/丹羽美智子(会計担当)

技術委員をやってくれる方を募集しています。加盟員(現役学生)の方も歓迎します。興味の

ある方は最寄りの技術委員までお知らせください。

6-2 第22回日本学生オリエンテーリング選手権大会実行委員会活動報告

実行委員長 片岡 由紀子

1 共存

人がひとりでは生きてはいけないうように、インカレもまたインカレだけでは生きてはいけない。

オリエンテーリングはそこに
1.1 開催地と 「森」があつてこそできる競技であり、当然のことながらその「森」には持ち主が存在する。これまでのインカレも、そして今回のインカレも、回覧板をまわす、挨拶を行う、といった基本的なことは行ったが、開催地の方々とのもっと血の通った関係があつてもいいと思う。

ショートの時に行った市民向けの大会は、事前の準備不足から、芳しい実績を残すことはできなかったが、運営自体にも、運営者の人数的にも余裕があると思われる関東地区での開催時には、こういった事業を積極的に行つてはどうだろう。

インカレ自体とは直接関係の内容な気もするが、競技人口の少ないスポーツである以上、「知らない人に理解してもらう」ことは重要であり、そんな地道な努力がもしかすると、遠く遠くで競技人口の増加（加盟員の増加 インカレ参加者の増加）につながっているかもしれない。

1.2 大学生以外のオリエン
ティアと 今までも、一般併設クラスは存在したが、学生のおまげ的な印象が拭いきれなかった（クラス分けが少ないなど）ことや、インカレ自体が一般オリエンティアに対して閉鎖的であつたこと、などで参加者数はそう多くはなかった。

やるなら経験も余裕もあると思われる今回の

インカレで、ということで大々的に大学生以外のオリエンティア向け大会「日光オリエンテーリング2日間大会」を同時開催した。インカレ参加者数の減少による収入（学連の活動費となる）の減少対策であつたことも確かだが、それ以上に日光の素晴らしいトレイルを堪能してほしい、学生の頑張りを応援してほしい、という思いがあつた。クラスの充実に加え、事前の宣伝活動も充分だったので、若者からベテランの方まで、実に幅広い層のオリエンティアの方に参加していただくことができた。

参加した方の反応も上々であつた。「日光」という特殊な条件ゆえに可能だつたことかも知れないが、この関係が今後も続くことを願っている。

残念なのは「日光オリエンテーリング2日間大会」の表彰式に学生がほとんどいなかったことだ。

1.3 スコアと これまでも、インカレ前走については、日本のトップエリートに個人的に依頼をし、インカレ前走での最終直前チェック、イベントの演出などに利用してきた。

今回初めて、スコアとインカレ実行委員会という組織と組織の関係で協力していただいた。初めてだつたので、というのは言い訳になるが、事前の十分な協議ができないままに当日を迎えてしまい、双方の認識の違いから、スコアの方々に不快な思いをさせてしまい、大変申し訳なかつた。

スコアにはたいへん有能な人材が揃っているので、事前に十分な協議を行った上で、大いに利用させていただくと良いと思う。

2 次へ

運営は「ヒト」と「ヒト」とのつながり。

2.1 「紙」も「ヒト」も利用
しよう
インカレの反省書は、毎回残され、参考になること

もたくさん書かれていると思う。しかしながら、反清書の多くは終わってしばらく立っているから書かれている。記憶として頭のなかに存在していることも、つつかれないと現れない場合は多々あり、そういった記憶の多くは、反省書では触れられていないことと思う。「聞いてくれれば」なんらかの回答を記憶の奥底から引っ張ってくるのが可能だと思われるので、反省書を参考にするとともに、前任者に直接話を聞くのが一番である。幸いにも、現在は運営者のほとんど、責任者、

チーフクラスにおいては全員がメールアドレスを取得している。面識がなくても、遠く離れていても、比較的聞き易いのではないだろうか。

2.2 学生も「ヒト」、運営者
も「ヒト」
マニュアルがあれば、それに従い機械的に運営することは可能で、かつそれなりの運営ができるであろう。しかし、そこに熱い何かをそそいで、生きたインカレにして行くことは重要だと思う。運営に対する「自己の満足」のためではなく、「学生のために」熱い何かをそそいでほしい。そうして血の通ったインカレは、きっと学生にとって、印象深いインカレになるのではないだろうか？

思いつくままに書いてきましたが...。今後のインカレのさらなる発展を期待しています。

6-3 第23回日本学生オリエンテーリング選手権大会実行委員会活動報告

実行委員長 松久 覚

1 はじめに

参加者が900人弱となり、どうなるものかと思った大会が終わって約1年となりました。この報告は大会報告書(成績表)に記載した内容を一部修正しておりますが、2001年度インカレの参加者は更に減少する見通しとの話を漏れ聞きました。少子化に伴う子供の減少は、今後も避けて通れない問題ですし、今後更に深刻化していくのは間違いありません。また、平成14年より実施される学校週5日制も、学校で行われるクラブ活動が活発化する方向には決してならないようです。社会全体が、決して集団でのスポーツとかクラブ活動といったものに対して前向きな方向にむかっていない状況で、単純に今まで通りのことをしたからと言って参加者も増えなければ、競技人口自体が増えるとも思いません。2005年に世界選手権を開催しますが、世界選手権を開催したからと言って、メジャースポー

ツの仲間入りがすぐ出来るわけもありません。

私はオリエンテーリングというスポーツが、やたらと「ピュア」で最近よくとりあげられる「商業スポーツ」と日本ではまったく無縁の存在に有るのが、良い意味でも悪い意味でもこの「インカレ」の変遷から出てきている気がしています。私が社会人になった直後の1990年頃、とあるリースや信販を手がけている、今バブルの後遺症で苦しんでいて、某銀行の「お荷物」となってしまった企業が、「名前が似ている」との理由で某新聞社を巻き込んでスポンサーにつくという話が盛り上がった時期がありました。この時には、結局話しが詰まっていく過程でバブルが崩壊し、すべて白紙となってしまいました。その後、毎日新聞社さんのご理解を得ることが出来、現在の運営体制が確立できたのは、正直言って、本当についていたとは思っています。

「××新聞社杯」を貰う必要はないと思いますが、

インカレの成績を全国紙各誌がきちんと載せてくれるような、「スポーツとして認知される立場」を確立できるよう、取り組んでいく事が重要です。ノルディックスキー複合のように、「世界に通用する強い選手」を輩出する事も必要でしょうし、「知力、体力、精神力」が揃って始めて成績が出る大変面白いスポーツである事をもっとアピールする事も必要でしょう。工夫と知恵が必要ですが、何よりもまずは情熱が必要です。学生諸君がインカレ&日本学連を更にオリエンテーリングを良いものにしていく為に、しっかり取り組んでくださるよう、この場を借りてお願い致します。

2 役員数の減少に関して

2-1 少数の役員での運営について

今回のインカレは、結局約 75 名（関東&関西からの強力助っ人含む）の役員の皆さんに運営をして頂きました。一般併設クラスでの SI カードの使用や、輸送関係を日本旅行の皆さんに殆どお任せするなど、人員削減を図ったつもりでしたが、結局当初目指していたよりは人数が増える結果となってしまっています。クラシックとリレーの会場が同じであるとか、役員宿舎を会場内に確保する等、小人数でも耐えうる環境の整備をしましたが、当日はなんだかんだと人が足りない場面が出てきました。

どこでもそうだと思いますが、結局「自分で判断して、率先して動く人」が何人居るかが大事で、頭数は何人居ても一緒ではないかという気がします。参加する学生が激減し、今後更に役員不足が進むのは間違いない状況です。従来独身の大学卒業後 5 年目ぐらいまでの人を主戦力として運営してきたインカレの役員も、とてもその世代の人達だけでは運営出来ない状況に追い込まれつつあると実感しています。子供が居たり、仕事が忙しいために土日ままならず、インカレも当日しか手伝えないという人達を、「実体のある戦力」として使えるような運営システムを立案していく事も必要になってくると思います。また一方で、毎年同じ人が同じパートの役員をやる事によって、負荷の低減を図ることもひとつの解決策として有ると思います。

今回のインカレでは 結局イベントパートの殆どを、

関東地区からの助っ人でまかなう事になりました。大会前 2~3 週間で、殆ど何も出来ていない状態から、なんとか体裁を整えることが出来たのは、彼らの日光他の経験を踏まえた効率的な運営準備に有ったと思います。マラソン大会の運営と異なり、毎年まったく同じ事をすればいいという事はないですが、やはりオリエンテーリングでも過去の運営経験は極めて重要だと思います。日光（栃木）での定期開催等も行われ、今後更に前回（過去）の経験が生きる大会の運営が増加すると思われれます。

現在のような、開催地域を中心とした役員募集だけでなく、過去から何度も言われており、山口インカレでは少なからず実施された、日本学連全体で各パートの役員登録制といった方式を本格的に採用する検討を始める時期が来たと感じています。役員の母数自体が減少し、かつてのように、卒業後 1 回~2 回インカレを運営したら、もういいでしょう。では済まなくなっている現状を意識改革も含めて行って頂きたいと思います。

2-2 事前準備の負荷低減について

10 年程前に経験した「岐阜インカレ」の際には、山のようなコピーと、会議の開催連絡と、細かい事まですべて擦り合わせていく作業に追われ、ほとんど疲れていた記憶があります。また一方で、5 年程前に「べい」の役員として運営を経験した、「静岡インカレ」の際には、マニュアルとプログラム以外殆ど資料も経験も無いままで運営に臨み、「何にも知らない役員とはこうなるのか」と痛感もしました。

今回も電子メールという媒体を通じて、情報の連絡や討議を行ってききましたが、便利さと同時に危うさを持っていると痛感しました。

【メリット】これは当然わかりやすく、「情報の共有化」、「意志決定の迅速化」、「打合せ回数の低減」、「資料のペーパーレス化」等々の効果が多分に出ました。私自身、会社では 30 すぎの中核社員（一応）、家庭では既婚 2 児の父親という立場でありながら、実行委員長という役職を、それなりにこなせたのは、このメリットのおかげと言えます。一方で、デメリットは下記点等があります。

【デメリット】 今回は、チーフ用のメーリングリスト等を作成しなかった為、特に「情報過多」、「重要な連絡としようもない情報の層別不可」、「連絡忘れの発生」等々さまざまな問題が出ました。特に1月中旬～3月の大会直前までは、1日30通程度のメールが飛び交い、『実は読んでいません』という一般役員が少なからず出現しました。確かに私が持っている情報と、ほぼ同じ情報を他の役員の方までが受け取るというのが、よかったかどうかはわかりませんが、その事がよかったという意見も無いわけではないので、今後「チーフメール」とか「関係者限定のメーリングリスト」の複数使用等を検討して頂いた方が良いかもしれません。

3 地図について

今回の地図は、山川さんのお力で、大会2週間前に納入をして頂く事が出来ました。地図のチェックや番号書き等相当量の作業がありますが、徹夜や一部役員への蹴寄せ等が発生せずに済みました。

すべてをRMOに発注して「お任せ」というのは今後難しくなると思いますが、「早期納入」というのは、運営負荷低減のために、来年以降も「MUST要件」として日程を組んで頂きたいと思います。

また、モデルイベント地図を、地元の三河 OLC が昨年5月に公認大会を開催した地図をベースに行いました。結局それなりに再調査して頂きましたが、それでも相当負荷は少なかったと思っています。

今後も山川さんにとりまとめをお願いしながら、上手くプロマップ - 等を活用する等、新しい方法の検討

をどんどん検討して頂きたいと思います。

4 一般併設クラスでのSIカード採用について

SIカードを利用して感じたのは、「事前準備の大幅増」と「当日および事後業務の大幅な低減」という事でした。ゴール人員や計セン人員の削減を思いきって出来たのも、SIカード利用の効果です。

今年の反省点については、別途計センチーフから詳細の引継ぎが行われますので、それを是非生かして頂きたいと思います。

5 最後に

今回の開催地は、2005年に開催するアジア初の世界選手権開催地です。地元の皆様の熱意を準備および大会開催の期間中、ひしひしと感じました。クラシックの日に「トレイル0」を開催して頂き、一部の方には体験して頂けた事と思います。また、大会コントローラ補佐の落合君が色々動いて頂いたお陰で、地元ローカルとはいえ、テレビ取材をして頂いたり、地方紙に写真入りで大きく取り上げて頂ける等、ご後援を頂いている毎日新聞殿以外のマスコミにも取り上げて頂きました。オリエンテーリングというスポーツを良い意味でメジャーにするのに、「アジア初の世界選手権」というキーワードは大変有効であると実感しております。学生の皆さんにも、是非出来る事からでいいので、2005年に向けて協力をお願いしたいと思います。

以上、今後もインカレそしてオリエンテーリングが、発展しつづけるよう皆で前向きに取り組みましょう。

6-4 第8回インカレショート実行委員会活動報告

実行委員長 木保 順

はじめに

20世紀最後のインカレショートも既に過去のこととなりましたが、深秋のガリバーの森で見事選手権者となられた紺野選手、小林選手の栄光と

それぞれの目標を持たれて参加された選手各位の熱戦はインカレシヨートの歴史と参加者各位の胸の中に確実に刻み込まれたことでしょう。

さて、本大会から西暦年度を付けた大会名称に変更されましたが、春の IC、秋の ICS の歴史の積み重ねは、インカレは年中行事、用意されたもの、という意識を加盟員の皆さんに与えてしまっているのかもしれませんが。しかし、インカレは学生OBたる実行委員会や技術委員会が作り、学生は参加するのみ、というわけではないのです。私たちは、皆さんの委託を受けインカレの実務を担当させていただいているだけであって、その方向性は主体たる皆さんが考え決めていくことと考えます。その点を踏まえてこれを機会にここ数年の活動報告書をお読みになり、インカレについて考えていただければ、と思います。

なお、本大会併設大会におきまして一部のクラスが、実行委員会の不注意により競技不成立となりましたことを深くお詫び申し上げます。

本大会の開催に当たりましては、地元高島町及びガリバー青年旅行村の皆様のご協力をいただきました。また、ご後援いただきました滋賀県及び県教育委員会、高島町教育委員会、ご協賛いただきました(株)アシックス様、前日イベントを開催していただいた滋賀県オリエンテーリング協会をはじめご協力をいただきました各位に感謝申し上げます次第であります。

1 運営組織について

関西地区では奈良 IC 以来のインカレ開催であり、インカレシヨートは初の開催である。2000 年度 ICS 実行委員会は 1999 年 6 月の理事会の承認により正式発足したが、その半年ほど前から準備メンバーがテレインハントや実行委員集めを開始しており、4 月には実行委員会設立準備会を開催している。

今回の組織化におけるキーワードは以下の 3 点であった。

予算制約による人数の絞り込み

若手中心で新しいアイデアによる運営
滋賀 IC を見据えた人材育成

に関しては、関東と比較して比較的近距离に大学が立地している関西の特性も生かし、院生を中心として費用的に規模の抑えた組織化ができたと思われる。及びその裏テーマである についてであるが、「やりたいことを実現しよう」というスローガンのもと、若手が主担当となり、少数のベテランが補佐をする体制とした。関西地区の学生は大学大会及び地区学連の定例戦といった中規模の運営経験には恵まれているが、大規模大会の運営経験を有する者は少ない。そういう構成であったため、経験に引きずられずから自分たちの発想で運営ができた反面、経験不足のためなかなか物事が決まらない、進まないということもあった。しかし、若い力は馬力があり、それをもって乗り越えてきた。今回のメンバーがどれだけ滋賀 IC に関われるかは分からないが、今回の経験は何らかの形で継承されると考えている。

今後のインカレシヨートにおいても予算制約、地方開催といった同様の課題があると思われるが、組織の立ち上げにおける提言としては、大会コントローラの職務の 1 つである「運営組織、人事、会計及び競技運営全般を確認すること」を拡張した、組織面・運営面でのアドバイザーの派遣が挙げられる。やはり、地方ではキーマンはいても全体を知る者が少ない。地元のアイデアをうまく誘導してくれるアドバイザー的な存在（実行委員長がその任かもしれないが）が地方開催でのキーになるとも思われる。

なお、委員会の活動実績は以下の通りである。

分類	内容	実施日
会議	発足会議	1999 年 7 月 3 日
	第 1 回チーフ会議	2000 年 3 月 4 日
	第 1 回全体会議	2000 年 3 月 19 日
	第 2 回チーフ会議	2000 年 6 月 18 日
	第 1 回幹事会	2000 年 8 月 11 日
	第 2 回全体会議	2000 年 9 月 16 日

	第 2 回幹事会・第 3 回チーフ会議	2000 年 10 月 1 日
	第 3 回幹事会	2000 年 10 月 21 日
	第 4 回幹事会	2000 年 10 月 31 日
地図 作製	トレインハント	1999 年冬
	地図調査合宿	1999 年 8 月 7 日 - 8 日
	一次調査	1999 年 11 月 23 日 - 2000 年 3 月
	二次調査	2000 年 4 月
	三次調査	2000 年 7 月 - 9 月 30 日
試走 会	第 1 回試走会	2000 年 3 月 18 日
	第 2 回試走会	2000 年 6 月 18 日
	第 3 回試走会	2000 年 8 月 12 日
	最終試走会	2000 年 9 月 15 日
	テープ巻き	2000 年 9 月 30 日
	設置	2000 年 11 月 3 日
直前 準備	資材準備	2000 年 10 月 22 日
	演習ハースル	2000 年 11 月 4 日

2 大会コンセプトとそれを踏まえた大会構成について

実行委員会としての今大会のコンセプトとしては以下の 2 点を設定していた。

ショートの競技特性を踏まえた大会

多くの参加者に楽しんでいただける大会

この 2 点を踏まえ、トレインの選定、クラス設定、コース設定、競技形式、広報など諸活動を規定していった。

2.1 テレインの選定について
 テレインの選定は大会コンセプトに基づいて行った。実行委員会としては、ショートディスタンス競技の競技特性を「常にスピーディな意志決定を強いられる」と解釈していた。この特性を踏まえ、大会を開催した「ガリバーの森」及び大阪市近郊トレインのリメイクの 2 つを候補として検討した。検討の結果、多少狭いがな

だらかで植生のよい「ガリバーの森」での開催とした。しかし、交通的には若干不便であり、良質のトレインが不足している関西地区の状況に資するものであったかは、今後の利用状況による。また、今後は新規トレインのみならず、リメイクトレインでの開催も当然主流となってくるが、ショートでは決勝ゴールを会場に持てきたい、規則で登距離が 5% に制限されているなどの条件があり、関西地区の既往トレインの活用は比較的難しい、というのが今回の検討の結論であった。

2.2 コース設定について
 本大会のコース設定の勘所は、小規模なトレインでの予選・決勝及び併設大会のセッティングであった。全般的にトレインの面白いところを活用したセットであったと考えている。選手権クラスは、大会コンセプトに基づきトレイン特性の違う 3 つの部分をもってもらうことにより、スピーディな状況判断の切り替えを要求するコースとした。また、大会コンセプトに基づき B-final 出場者、併設大会参加者にも競技を楽しんでもらうということでそれなりのコースセッティングをした。

2.3 併設大会のクラス設定について
 大会コンセプトに基づき、多くの人が楽しめる大会となるように多様なクラスを用意した。学生向けにはエリート志向の参加者のための選手権体験クラスを用意し、エリート選手との比較をできるようにした。また、一般向けには長い距離は苦手という人のためのウルトラショートクラス、常に意志決定を強いられるというウルトラコンピクラスを用意した。多様なニーズへの対応は大会への参加誘因力となるため、財政基盤の弱いインカレショートの運営においては運営の省力化とともに検討すべき事項であると考えられる。

3 運営に関する特記事項

3.1 外部からの協力について
 前述のようにインカレショート

の財政基盤は弱い。そのため、参加者増加策とともに外部からの協力を得ることが重要な要素である。今回特記すべき事項としてはスポンサーの獲得、前日イベントの委託、競技地図の買い取りが挙げられる。

スポンサー：今回は株式会社アシックス様に大会をご協賛いただき、協賛金（ナンバーカードの印刷費用）及び賞品を提供していただいた。不況の中、企業の協賛活動は下火となっているが、逆に販促活動を強化している企業もある。また、オリエンテーリングのスポーツとしての認知度向上のためにもスポーツメーカーとの関係維持は重要なポイントと考える。

前日イベント：今回は滋賀県オリエンテーリング協会に大会前日のモデルイベント開催を委託した。このことにより実行委員会としては前日に費用・人材を割く必要がなくなり、県協会としては「志賀清林」という新たな競技地図を手に入れたというメリットがあった。また、地元組織との関係強化は地区のオリエンテーリング活動の有機的な発展のためにも重要なポイントであると考ええる。

競技地図買い取り：本大会の競技地図の白図及び所有権・販売権は大会終了後、日本学連と関西学連の合意書のもと、関西学連に委譲された。その際の白図の購入料金が実行委員会に支払われており、大会会計を助けている。また、インカレで開発したテレインを関西学連が有効に活用するということも今後のインカレの地方開催の意義を考える上で重要なポイントであると考ええる。

その他：関西・東海地区の地域クラブには資材借用等でお世話になった。また、関西学連加盟校にも資材作成等でご協力いただいた。この場を借りて謝意を表したい。

3.2 全クラスEMIT使用について
本大会ではコントロールカードとしてインカレでは初の全クラス EMIT の電子パンチングシステムを使用した。ショートではタイトなタイムスケジュールの中で予選結果の確定 A-final のスタートリスト作成を行わなければならない、ペナチェックが一瞬で可能な電子パンチの効用が大きかった。また計センシステムを一本化するために全クラスでの電子パンチ採用とした。今回はパンチングフィニッシュの問題もあり、ナンバーカードとストップウォッチによる計時を行っていたが、実施規則の改正、スタートユニットの増備により計時も含めた電子パンチングシステムの採用は、競技運営の大幅な効率化に資するものと考えられる。

3.3 広報活動について
今回は大会の機運を盛り上げるために、大会の広報誌を作成し、学連機関誌をはじめ、地域クラブの機関誌に掲載していただいた。また、公式ホームページを作成し、大会情報の提供を行った。こういった地道な活動も大会基盤の醸成には重要であると考ええる。

4 反省点・検討課題

4.1 チェックシステムの整備
今回、要項 3（大会プログラム）の不備から一部クラスの不成立まで、実行委員会の不手際によるミスがかなりあり、幸いにも選手権は成立したが、参加者の皆様及び協力業者・団体には多大なるご迷惑をお掛けした。この主な原因は 1 に挙げた実行委員メンバーの経験不足による面が大きいが、運営組織としてはチェック機能の欠落が挙げられる。大会コントローラとの任務分担もあるが、競技レベルのチェックで多忙であるコントローラの他に 1 で提言した運営アドバイザーの派遣又は時系列チェックリストの作成など学連としてシステム的なバックアップが必要な

のではないかと考える。

4.2 加盟員の主体意識の向上 今回の B-final は 30 秒スタートというタイトな設定で行ったため、現場では混乱が生じており、参加者からの苦情もあった。これはスケジュールの関係上、実行委員会で検討した「工夫」であったが、結果的にはうまくいかなかった点の 1 つである。しかし、系統的に問題があったかというところではなく、問題の大半は参加者が事前にシステムを知らないことにあると推測される。インカレは学連主催事業であり加盟員に対するサービスはあまり過剰にしたくはないと考える。加盟員には事前にプログラムを熟読し、主体性をもってインカレづくりに参加していただきたい。

4.3 旅行業者について 日本旅行との契約が成立しての初めてのインカレであり、今回の宿泊輸送部門は日本旅行五反田支店に担当していただくとともに選手権クラスのナンバーカードの一部を提供していただいた。諸手配をアウトソーシングできたとともに専門家の担当による高度化が図れたと思うが、若干の課題もあったので今後の検討として記す。

まず、地方開催の場合、五反田支店の担当者とのコミュニケーションが難しい。今回は関東在住

の実行委員を担当に当てることにより対応した。また、現場の確認が難しいことも挙げられる。地元業者ならば事前の下見等の同行も可能であるが、東京からの出張は困難である。今回は交通不便な開催地であるため実行委員会としては念入りな現地確認をお願いしたかった。宿泊の確保でも今回は遅くに申し込んだ参加者にはご迷惑をおかけした。

これまでは、学生 OB の方のご協力として宿泊輸送部門を担当していただいた訳であるが、今年度以降は契約として対応していただくこととなるため、今後はよりビジネスライクな対応を期待したい。そのためには学連側としても運営ニーズを正確に日本旅行側に伝え、契約に反映する必要があるのではないかと考える。その際には地方開催の視点も忘れずにご検討いただきたい。

おわりに

最後ではあるが、つたない運営で各位には多大なご迷惑をおかけしたが、何とか大会を開催できたのも皆様のご助力があったのもであり、ここに謝意を表したい。これまでの蓄積とともに新しい視点でのインカレショートの実現を願ってやまない。

6-5 第 9 回インカレショート実行委員会活動報告

1 「加賀のスーパーテレインを走りたい」

実行委員長 木村 佳司

2001 年 11 月 23 日、私は石川県加賀市の上木キャンプ場に居ました。そこに続々と沢山の人が詰めかけてきては、手に手に小さなサンプル地図を持って松原の中に消えてゆきます。そう、日本学生オリエンタリング選手権ショートディスタンス競技大会、通称インカレショートを翌日に控え、そのモデルイベントが

上木キャンプ場を会場として行われているのです。

真剣な顔をして地図を見る者、周囲を見渡して地図と現地をしっかりと確認する者、楽しそうに松原を巡る者、グループ内でルールを決めてタイムアタックをする者、後輩を引き連れて地図読みやルートプランのレクチャーをする者など、明日の舞台を控えて思い思いのスタイルで加賀海岸の松原を楽しんでいました。

このモデルイベントに参加してくれた 470 名の人たちを目の前にした時、インカレショート加賀大会が本

当に実現したんだなあという実感が湧いてきました。

話は20年ほど前の1982年に遡ります。島根県出雲市で島根大学オリエンテーリングクラブの合宿が行われました。この合宿に山口大学オリエンテーリングクラブに当時在籍していた私を含む数名が乱入してしまったことが、今回の発端だったのかも知れません。その時の合宿では浜山運動公園のトレインを使用しました。地図こそ3色刷の、当時としてもちょっと旧式の地図でしたが、トレインの通行可能性は素晴らしく、黒松の生えた砂丘を嬉々として走りまわる自分たちがいました。山口や広島など瀬戸内地方の灌木ばかりのトレインを走っていた当時の私にとって、砂丘はとて新鮮でした。「もっと楽しくオリエンテーリングをするために自分達で本格的なO-mapを作ってしまう。」浜山砂丘に魅了された私と当時の中国学連のメンバーは、自分たちの合宿用に、浜山に本格的なO-mapを作成してしまいます。学生時代のこんな体験が今回のインカレショート加賀を企画する原点となっています。

月日は流れ、大学を卒業し、就職で長野県に住むようになりました。

1988年4月2日。今回のトレインと同じ加賀市で行われた第6回金沢大学大会に参加するために、前日より信州大学の学生たちと一緒に加賀市に来ました。その時の宿は加賀市青年の家。お金の無い貧乏学生がどこから情報を手に入れたのか知りませんが、一泊400円の宿を探してきたのです。学生たちと同じ車に乗って早めに宿舎に着いたので、周囲をランニングすることにしました。どこまでも続く通行可能性の高い松原。緩やかに波打つ地形。そこには日本では珍しい、そしてオリエンテーリングに適した場所があったのです。そう、この加賀市青年の家は、今回のインカレショートのトレインの中にありました。「ここをナビゲーションしたらどんなに楽しいだろう。」これが私と加賀海岸の出会いでした。

翌日の金沢大学大会は、同じ加賀市でも北陸本線を越えた南側で開催されました。「城山官山」と名付けられた地図ですが、結構な傾斜で苦戦しました。大会を

主催した金沢大学のメンバーに「加賀の海岸はオリエンテーリング適地だけど、あちらで大会をやる企画はないの?」と聞くと、「加賀海岸は国有林なので利用が難しいんですよ。」という答えが返ってきました。「そうか、仕方がないんだな。」しかし私の頭から加賀のトレインへの思いが消えることはありませんでした。

私とこのトレインを引き合わせてくれたO-map「城山官山」を改めて眺めてみると、13年前当時の地図調査者の名前が掲載されています。その中の何人かは今回のインカレショート加賀の運営も行ってくれました。(この時に宿泊した加賀市青年の家は老朽化に伴って現在は廃止となっています。当時の建物は今でも残っています。)

それから11年が過ぎた1999年。インカレショートの候補地として北陸地区の声があがりました。この時、真っ先に頭に浮かんだのがここ加賀海岸。しかし加賀海岸はオリエンテーリングでは使用できないという情報を何度か聞いていました。そこで本当に加賀海岸がオリエンテーリングで使用できないのか、調査をしました。

当時加賀海岸が利用できないと言われた理由としては以下の4点がありました。

- (1)国有林はオリエンテーリングの利用許可が降りないのではないか。
- (2)その地域には希少植物があるらしい。
- (3)ラムサール条約地になっているのではないか。
- (4)地形が難しく調査できない。

もっとも4番目については、何とか乗りきる自信はありましたので、問題は上の3点のみでした。

(1)の国有林についての利用許可について

O-map「城山官山」が作成された時代には、全国の国有林においてオリエンテーリングの利用許可がなかなか出にくい状態でした。しかし時代は変わってゆきます。平成に入って、オリエンテーリング目的での国有林の利用が認められたケースが何点ありました。行政も少しずつ変化しているはずですが、そこで地元石川県オリエンテーリング協会を窓口にして国有林の入林許可を取れるかどうかから調査から始まりました。「案ず

るより産むが安し』思っていたよりすんなりと利用許可をいただくことができました。これも石川県協会のおかげだと思います。

(2)の希少植物について

こちら石川県オリエンテーリング協会にお願いして、希少植物が生えていると言われている場所を調査していただきました。その結果、確かにこの付近には希少植物の生えている地域はありますが、オリエンテーリングでは決して使用しない場所であることが判りました。海岸には海浜植物が多数生えていますが、こうした地域は今回の地図に含まれないようにしています。

(3)のラムサール条約地について

テレイン周辺の鴨池は確かにラムサール条約地で、自然環境を保護する必要があります。ラムサール条約地の範囲がどの程度なのか心配しましたが、競技エリアと離れており、問題がないことが判りました。

これらの問題をクリアした 1999 年 11 月、ちょうどインカレショート加賀大会の 2 年前に、第 0 次調査とも言うべき下見を行ない、あらためてテレインを子細に見てまわりました。ここで実行委員会はいきなり頭を抱えてしまったのでした。「ここで本当にオリエンテーリングの地図を作成することができるのだろうか？」波のようにうねる地形、細く長く伸びた尾根、交差する尾根。今までに見たことのない地形。「まるでベルギーワッフルのような地形だな。」こうして下見を行った者の間で、この加賀海岸の特殊地形のことを「ワッフル」と呼ぶようになりました。

さてこれを O-map の記号でどう表記すれば良いのか？ある程度能力のある人なら地図調査すること自体は可能でしょう。しかし、調査者間での表現のバラつきが、ものすごく大きくなることは想像に難くありません。さらにせっかく出来あがった地図においても、地形の表現方法が必ずしも競技者に最適だということはいえないかもしれないわけです。最初の難関をクリアしたものの、早くもインカレショート加賀大会は第二の難関に差し掛かってきました。

「調査のプロを使おう。オリエンテーリングの本場、スウェーデンのプロマッパーならきっと満足できる表現方法を示してくれるはずだ。地図の表現方法について、たとえ異論が競技者からあるだろうが、プロマッパーの表現であると言えればある程度の抑えは効くはずだ。」

2000 年 4 月。スウェーデンのプロマッパー、ペローラを加賀のテレイン調査に投入したのはこうした意図の元ででした。ペローラは短期間のうちにほぼ全域に足を運び、このテレインの骨格とも言える調査してくれました。この地図表記によってテレインの地形表記のガイドラインが示され、地図化に向けて大きく動き始めました。

ペローラが地図を調査する時の話です。日本海の海岸は密入国が多いエリアと言われています。そんな場所をしかも林の中を外国人がさまよっていたら警察に通報される可能性が無いとも言いきれません。そこでペローラを調査に投入する前に、地元の大聖寺警察に本人同伴で挨拶にゆき、森林管理事務署の入林許可書をしっかりと持たせて調査を行ってもらいました。これは加賀海岸ならではの話と言えましょう。

その後、国内プロマッパーである山川氏に 2 次調査をお願いし、細かな修正や日本国内の O-map の現状と大きく乖離しないようなローカライズなども行われました。こうして心配された地図化はほぼ満足のいく出来となりました。山川氏に言わせれば時間不足で十分にマッピングコントロールできなかった部分があるという事ですが、最初にワッフル地形を見た時の衝撃から考えると、2 人のプロは、まずは十分に役割を果たしてくれたと言えましょう。

いくら素晴らしい地図を作ろうと、いくら素晴らしいコースを作ろうと、どんなに地元交渉が大変でも、参加者が集まらなくては、大会として成功したとは言えません。日本学連の加盟員の多くが大都市、特に東京に集中しているという現実を見ると、石川は東京から距離が遠く、参加者が少ないのではないかという不安がありました。主催者である学生はある程度参加してくれるとしても、財政を支えてくれる一般参加者の

出足も気になるところです。

ちょうど同じ2001年にJOA(日本オリエンテーリング協会)主催の東日本大会が隣の福井県で行われると聞き、これは手を結んで連携したイベントにしなければならぬと感じました。例えば、2週間間隔でインカレショートと東日本大会を開催したとすると、参加者がそんな短期間のうちに2回も北陸まで足を運んでくれるとは思えないですから、どうしても参加する大会を一つに絞ってしまうでしょう。そうなるとお互いに参加者が少なくなり、お互いが財政難に陥ってしまいます。

そこで、今度は石川県オリエンテーリング協会だけでなく、福井県オリエンテーリング協会とも協力をして、インカレショート加賀大会と東日本大会とで見かけ上の多日間大会を構成してしまおうというアイデアを思いつきました。しかしながらこれを企画した時はJOAの主催事業と学連の主催事業のマルチデーイベントというのは前例が無く、どれだけ協力が得られるのか未知数でした。

幸いなことに、北信越地区には連絡協議会があり、連携を取り合う土壌ができていました。私も長野県協会の代表として北信越クラブ連絡協議会に参加させていただいていました。

こうした東日本大会とインカレショートのマルチデーイベントを推進した理由としては、オリエンテーリング競技者が減少傾向にあり、どのイベントも参加者が思ったほど集まらないという事実が1999年あたりから顕著になってきているという危機感でした。福井県協会もこのことに理解を示し、最終的には私たちインカレショート実行委員会側の示した日程案で東日本大会の日程を計画することを約束してくれました。

このマルチデーイベント化はかなりの成果を見ました。この北陸にあってインカレショート事前エントリー者数がチームオフィシャルを含めて900名を越えたのは上出来と言えるでしょう。

また東日本大会の事前エントリー者数は685名だったそうですが、これは同県が8年前に東日本大会を開催したときの、事前エントリー数を上回る数字となりました。今年、首都圏日帰り圏内で開催された公認大会よりも事前エントリー者が多く、この時代としては

画期的な数字といえるのではないのでしょうか。

学生はどうしてもオリエンテーリングが大学のクラブ活動の範疇に終始しがちなものですが、もう少し広く一般競技会にも参加してもらいたいとは思っていましたし、今でもそう思っています。また社会人オリエンテーリング愛好家にも学生たちの熱く戦う姿を見てもらいたい。日本学連の活動を少しでも多くの方に知っていただきたいと思っています。このインカレショートと東日本大会とのマルチデーイベント化にはこうした個人的な思いも入っていました。

そして2001年には福井の東日本大会とは別にもう一つ、インカレショートにとって大きく関係するイベントが行われました。それは8月に開催された秋田ワールドゲームズです。ワールドゲームズは秋田の飯島砂防林で開催され、加賀海岸と比較的類似のトレインといわれています。ワールドゲームズを2ヶ月後に控えた2001年6月、ワールドゲームズ日本代表選手を招いて加賀海岸で試走を行いました。代表選手にとってはワールドゲームズに向けてのトレーニングになったと思います。またインカレショート実行委員会にとっても、ワールドゲームズ選手から見た地図の表現方法やコースプランニングに対するフィードバックが行われました。これを機会にワールドゲームズ代表選手はそのままインカレショートの実行委員としても大会成功の為に尽力してくれることとなります。

全体としての設計図を描いてそれを軌道に乗せてしまった後の私は、実行委員長というより広報担当者として動いていたような気がします。私の関与するインターネットサイトであるorienteering.comや私も参加しているオリエンテーリングマガジンを活用して広報をしてゆきました。また併設大会へのエントリーでは日本学連主催大会で初めて、クレジットカードによる決済を導入したりと、新しい試みも行いました。

問題は徐々に解決され、実行委員会の歯車はインカレショート加賀に向けて回り始めました。試走・調査を何度も繰り返してコースも徐々に練られてきました。

インカレショートの骨格については私が設計して行きましたが、さすがに現地で直接指揮を取ることがなかなか出来ません。しかし、幸いにも今回は非常に優秀な実行委員に恵まれて運営準備は進んでゆきました。今回は地元の石川県で実質的に指揮をとってくれた小林力くんをはじめ、多くの実行委員の皆さんに感謝しています。

大会 5 日前から金沢入りして、地味な作業を重ねるうちに徐々にインカレショートが迫ってきました。最初の構想から 13 年、いよいよ憧れの加賀海岸のトレインを 900 名のランナーが走る日が近づいてきたのです。何度も見た夢が現実になるのです。実行委員会メンバーも続々加賀に集まりました。天気予報は降水確率 0%。心配することは何もありません。ココロおきなく学生たちに、それぞれの意気込みをトレインにぶつけ、競い、喜び、笑い、泣いてもらう準備が整いました。

私は現在、加賀市までは車で 5 時間かかる信州松本に住んでいます。自宅から遠い加賀の地でなぜ私がインカレショート直接企画したのか？ それはこの加賀海岸のトレインが私を魅了して止まなかったからです。

このインカレショート加賀大会は、幻のスーパートレインを走りたい一心の木村と、城山官山での金沢大学大会を実行した金沢大学の旧世代 OB、金沢大学の新世代 OB、森林管理事務署との交渉にあたってくれた石川県オリエンテーリング協会、そしてインカレショート成功の為に動いてくれた日本学連の OB、さらにワールドゲームズの日本代表選手たちによって作り上げることができました。

そしてその情熱を受けとめ、各種施設を提供してくださった地元加賀市 会場となった緑丘小学校の皆様、そして何と言っても貴重な国有林の利用を許可くださった石川県森林管理事務署の皆様には深く感謝したいと思います。

2 運営責任者報告

運営責任者 小林 力

北陸の 11 月下旬にもかかわらず、晴天に恵まれ、たくさんの方のご参加、ご協力をいただき、大会を無事終了することができました。この場を借りてお礼申し上げます。運営関係について、いくつか報告します。

大会コンセプト

今大会では、

- (1) テレインが、今まで経験したことのない防砂林である
- (2) 30 人ぐらいの実行委員で少経費でショートインカレを運営する

の 2 点を考慮し、

「経験したことのないテレインで、オリエンテーリング競技そのものを参加者に楽しんでもらい、運営は、特に手のかかる演出等はしない」

というコンセプトで準備を進めていきました。

実行委員会

今回の実行委員会は、今大会の運営のために初めて組織されました。実行委員は北陸地区在住者だけでは足りず、関東地区、関西地区在住者までお願いすることになりました。

このため、会議、試走会等の開催には、費用と時間の面で負担が大きいという問題が起こりました。幸いにも、実行委員全員が電子メールを利用できる環境にあり、会議等はほとんどメーリングリスト上で行え、大会への意識の差、情報の漏れは少なかったのではないかと思います。試走会についても、精度のよい地図が出来上がっていたこともあり、計画通りの負担で行えました。

また、E カード関係の知識をもっている実行委員が皆無、地図作成をどうするかということも問題でした。これらの問題は、その道のプロにお願いし、経費および作業の低減に寄与したものと思います。

人手の少ない地域でのインカレショート開催にあたり、今後の参考になればと考えています。

申込

今回の大会では競技クラスにより以下の申込方法を設定しました。

選手権クラス データを入力した電子データの提出（フロッピー，電子メール）
 学生併設クラスデータを入力した電子データの提出（フロッピー，電子メール）
 一般併設クラス 郵送受付・電子メール受付・会場受付・クレジットカードによるコンビニ受付

パソコン環境の充実化もあり，選手権クラスおよび学生併設クラスは，実行委員会から事前にエントリーフォーマットを電子データで各学連代表に配布し，各学連代表より各大学代表へエントリー入力をお願いしました。各大学代表でエントリー入力後は，各学連代表が取りまとめ実行委員会へ提出していただきました。

これにより，実行委員会側の作業および入力ミスが低減したものと思います。また，氏名の入力ミスが数件ありましたが，今後も，この方式が継続されるかと思しますので，学生側でチェックのほうはお願いしたいと思います。

一般併設クラスについては，郵送（89：31％）電子メール（142：49％）会場（6：2％）クレジット（53：18％）と，電子メールを利用した申込が半数を占めています。また，今大会で初めて採用された，コンビニクレジット決済申込については，web上のみに周知していなかったにもかかわらず実に，申込の2割弱を占めています。働く社会人としては，手軽さ，時間の制約のなさの利便性が助かったのでしょう。今後，クレジット申込方法が期待できるものと思います。

広報

今大会では，テレインの魅力を参加者に伝えるため，要項1にサンプルマップの公開を行いました。2cm四方の小さな地図でしたが，加賀海岸の特徴を良く現していた部分かと思えます。今までみたことのない地図表記がしてあり，興味を引かれた参加者もいたのではと思います。

要項2においては，要項2だけでの情報で，大会当日に来場できるよう，周辺地図を掲載し，観戦だけに

来られる方の，利便を考慮したつもりです。

要項3（大会プログラム）では，大会参加者の流れに沿い，判り易いように，図を利用し表記する形をとりました。配布については，学生は大学ごと，一般併設は参加者ごとに郵送で配布しました。プログラム未着，到着の遅れによる問い合わせはなかったことを報告します。

プログラム配布にあたり，チームオフィシャルのIDカードを事前に同封しました。これは，実行委員会の当日の仕事を減らすことを目的としています。IDカード誤配を心配しましたが，誤配はなかったものと報告します。今後も，継続してみてもどうかと思います。

資材

今回も3月のインカレ（愛知インカレ）より引継いだ資材を活用し，資材費用を低減することができました。さらに，緑丘小学校，石川県OL協会およびRMOサービスからも資材の協力を得ることができました。

今後も，インカレショートの会計規模等から考えると，インカレ，地元団体および地域クラブ等からの借用は，必要ではないかと思えます。愛知インカレ（2001年）からの引継ぎ資材は，矢板インカレ（2002年）へ引継いでいます。

演出

役員を少数にするため，人手のかかるイベントボードは，選手権決勝のみにし，選手権予選速報や，実況中継は，耳からの情報を重視し，演出を計画しました。

クラシカルやリレーと違い，めまぐるしく順位が変わるショートでは，目からの情報であるイベントボードをしていたのでは，順位の変動がリアルタイムに，緊張感を保ちながら参加者に伝わらないということも理由の一つです。

また，運営参加者も仕事をしながら，状況が把握できるというのも理由にあります。せっかく運営しているのだから，誰が優勝したとかはやはり，気になることです。

今回は，優秀なスピーカーの協力を得ることができ，参加者および運営役員には，リアルタイムに実況を楽しんでいただけたのではないかなと思います。

今後のトレイン利用について

加賀海岸は、1 年を通してオリエンテーリングを楽しめるトレインです。ただし、国有林ですので、今後、今回のトレインを合宿および大会開催等で利用したい場合は、石川森林管理署の許可が必要となります。石川県 OL 協会が窓口として相談に乗りますので、ご一報ください。

最後に

2001 年度インカレショートは、いかがでしたでしょうか？経験したことのないトレインで存分に楽しんでいただけたでしょうか？今回の大会が、参加者および運営者の心に残るものであればうれしい限りです。

大会は、成功したものと考えております。これも、参加者、運営者および地域の方のご協力、ご理解があってこそだと思います。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

3 競技責任者報告

競技責任者 山岸 甚太郎

私はインカレショートの競技部門を担当し、主にコースセットについて関わりました。今回のトレイン「加賀海岸」は人の手で作られた砂防林であり、通称「ワッフル」と言われている網の目のような複雑な地形は、砂防林を作った結果できたものです。このようなトレインは日本にはあまり存在せず、参加者の大部分がはじめてみる地形であったと思います。よって、このトレインの情報をできるだけ公開することが必要だと感じました。

大会前日のモデルイベントで公開した範囲はこのトレインの特徴を大きく含んだ部分であります。また、このトレインの複雑な地形を生み出した歴史が描かれていた展示館を開放し、選手にいち早くトレインを理解してもらうよう努めました。このトレインを理解していただければ、この人工で作った砂防林は地形が整然としていることがわかり、一見複雑な地形が、実はたどることが可能であり、うまく使えば自分の現在地を特定する材料になります。

このトレインの地形の特徴として、大きく 2 つに分けることができます。地図の北東部分の範囲は、小尾

根がくもの巣のようにいろんなところに張り出しており、概して植生は良好になっています。もう一つの中央部分から南西部分にかけての範囲は、海岸線と平行、垂直に小尾根が伸びており、一部植生が悪いところも存在しますが、地形をたどっていくことが容易になっています。

コースについてですが、トレインの植生がおおむね良好であること、地形が緩やかであることから、スピードレースになってしまうことが明らかであったので、コース距離は長めに設定しました。

予選は道走りを多用したルートになってます。予選の範囲は比較的植生の厳しい所を使用したのですが、上手に道を使って、ポイントからしっかりアタックする基本的な技術を要求したルートが多くなっています。

決勝は前半はテクニカルなレッグが多く、後半は地形を生かして高速ナビゲーションをすることのできる部分がはいった、巡航速度の速いレッグで構成されています。その理由として、前半は地形が複雑であること、後半は地形が単調であり、たどっていくことでスピードを上げることができるためです。また、ウィニングタイムは、男女とも 20~22 分ぐらいになると予想していました。前半の範囲が難しいわりにコース距離が長く感じたところもありましたが、予選等で地形に慣れた選手が、決勝の後半のレッグでスピードを上げることができたのではないかと思います。決勝は男女とも、ワッフルの地形を生かしたテクニカルなレッグとダイナミックなレッグを織り交ぜた楽しいコースに仕上がったように思います。みなさんはどう感じましたでしょうか？

競技部門での運営ですが、全体として、運営上余裕の持った競技方式であったと思います。

今回はパンチングフィニッシュであったため、選手権予選は効果的な演出をすることができましたし、B ファイナルは成績確定の負担が少なくなりました。また、パンチングフィニッシュのために、ゴール付近に人が固まり混乱する恐れもありましたが、大きな問題はありませんでした。選手一人一人がパンチングフィニッシュをスムーズにして終わる、つまりパンチングフィニッシュを理解しているならば（今回は大部分の

選手がスムーズにしていたのでうまくいったのだと思います)今後この方式を採用しても問題にはならないと思います。

Bファイナルは今回運営と競技の高いレベルでの両立を目指して一斉スタート方式を採用しました。男女各レーンのトップゴールがそのまま優勝者になるという、結果がわかりやすい方式としました。コースパターンは男女とも2×2の4パターンで行い、ほとんどタイムの変わらないルートにしています。ゴール付近は程よくばらついていましたし、大きな混乱もなかったようなのでこの方式はよかったように思えます。また、大きく遅れて帰ってくるような選手も多く見られず、時間的な余裕の持った方式であったと思われる。競技方式については、要所は押さえておくと、運営者にとって負担の少ない形をもっと考えていくべきではないかと思えます。

最後に、これから運営に携わるかもしれない方々がこの文章を読まれると思いますが、オリエンテーリングの準備に自分が関わっているということは面白い経験です。地図ができあがり、試走を行う時の興奮は運営者でしか味わえません。どんどん技術が進んでいるオリエンテーリングの運営の設備には驚かされます。参加者をうまく導いてゆく様子は運営しているという実感を持たせてくれます。

私は今回のようなテレインで運営したという貴重な経験に満足しています。そして、この大会を成功に導いてくださった数々の方々に感謝します。

4 大会コントローラー報告

大会コントローラー 吉村 年史

今回のインカレショートの特筆すべき点は、春のインカレを含めて、インカレ史上初めて北陸地方で開催されたということであろう。そのため、実行委員の大半はインカレ運営の経験がなく、大会運営はかなり大変であったと思う。また、インカレ運営経験者が少ないにもかかわらず、実行委員が40人弱という、少人数で大会運営を行ったという点は評価できる点である。

今回のテレインは砂防林であり、フラットで走行可能度も非常によく、インカレショートにはふさわしいものであった。さらに大会前日が祝日ということもあり、モデルイベントとして、砂防林の一部を開放し、トレーニングの環境を用意した。このモデルイベントは、参加選手にとって未知のテレインを事前に経験することができ、有意義なものとなったに違いない。また、特異なテレインということで、調査・作図に海外プロマッパーを投入したことにより、完成度の高い地図が出来上がった。そのため、コース設定に制約を与えることなく、予選および決勝ともにインカレショートにふさわしい最高のコースが出来上がった。また、毎年のように実行委員会を悩ませているBファイナルについては、テレインを最大限に活用した趣向を凝らしたコースが提供できたと思う。

演出では、選手権決勝において、最先端の技術を駆使することにより、ゴールした選手のタイムを即座に放送し、リアルタイムに順位が更新されていった。これは、選手、観客ともに、非常に良かったのではないだろうか。来年以降もこの形式が継続されることを切望する。

今後のインカレビジョンを考えたとき、インカレショートは少人数で運営できる体制にしていかなければ、近いうちにインカレショートの存続が危ぶまれていくことになるかもしれない。そのため、実行委員会にとって必要以上に労力を要する作業は減らしていかなければならない。選手権の学連配分枠の返上による再エントリー作業というのは、実行委員会には非常に負担となる作業である。この問題は毎年のように発生しており、早急に解決しなければならない。これは、選手権の競技者数が男子180人、女子120人と多いためであると考えられる。現在、春のインカレ(クラシック)では、選手権の競技者数を削減する動きがあるのと同様に、インカレショートにおいても選手権の競技者数の削減について考えても良い時期に来ていると思う。

最後になりましたが、大会コントローラーとして、私自身の力不足や九州在住という遠隔地からの任務ということもあり、細部にまでチェックすることはできなかったが、実行委員会をはじめとする関係各位の協力により無事に大会を終えたことに感謝したい

第 2 部 活動報告